

---

# 慈悲無き運命

熊倉 義紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

慈悲無き運命

### 【Nコード】

N3702N

### 【作者名】

熊倉 義紀

### 【あらすじ】

さくらの続編です。

数カ月後、会社の倒産によりカレンの仕事を手伝う事になったジョー。そこに、新たな敵が現れる。

## 序章 ジョーとカレン再び

・・・あれから、数ヶ月の時間が過ぎた。

朝礼で国山が言った。

「みんな聞いてくれ 大変言いにくいことだが、昨日 わが社は2度目の不渡りを出した」。

最初、俺は何を言われたのが良くわからなかった。

国山は言った。

「解散！」

みな、それぞれ荷物を片付けると来たばかりの会社から帰路についた。

行く当てもなく、俺はパチンコ屋でパチをブツて夕方にはすっからかんに成っていた。

「ちっ！湿気てやんの！」俺は悪態をつくるとパチンコ屋を後にした。空がゴーゴーと音を立てていた。

その冷たい乾いた風に吹かれると、心まで荒んで行ってしまう気がした。

「明日から、どうすっかな？」

ポケットから財布を出し、中身を確認めた。

1280円入っていた。

「まじやべー、プリペイドとか持ってなかったかな？」

財布をこそごそ搜すと、スーパーのポイントカードだのガソリンスタンドの会員券などにまじり、名刺が入っていた。

『花園カレン探偵事務所』と書いてあった。

カレンは、この名詞を渡す際に「困ったことが有ったら、ここに来いよ」と言っていた。

・・・困ったこと有ったよカレン・・・

俺は、カレンの事務所にワゴンRを走らせた。

そこは、本当に寂びれた雑居ビルの3Fだった。  
エレベーターなどと言う気の利いたものは無く、俺は階段を上った。  
2Fの踊り場まで行くと丁度カレンが降りてきた。

「あつ！何しに来やがった！」

「・・・実は、困ったことが有って・・・」

「何だあ？言ってみろ、金以外なら相談に乗るぞ！」

「・・・その金の事です・・・」

するとカレンは、「じゃっ！」と言って階段を下りていった。

「待ってよカレン！会社潰れちまったんだ！・・・俺を雇ってくれないか？」

カレンは振り返った。

「・・・そいつは、気の毒だな・・・」

俺は、一筋の光明が見えた気がした。

「もう、飯食う金も無い・・・家賃も払えないし、車も売り払うしか・・・最もこのオンボロじゃ、二束三文だろうけど・・・」

「わかった！！アパートは、引き払って来い」。

「えっ！」

「ここに住み込みだ、車は社用車として使ってやる」。

「いいのっ!!」

「給料は少ないけど、住む所と飯位は何とかしてやる」。

「ああっ・・・なんていい人なんだ・・・神様！仏様！カレン様！」

こうして俺の助手と言う名の『奴隷』生活が始まった。

## 新たなる戦いへ

ガスッ！

いきなり小突かれて目が覚めた。

「何時まで寝てやがる！」

会社が潰れて3日後、少ない私物を持ち込み事務所での生活が始まった。

ソファで毛布に包まって寝るのは、意外と快適だ。

「ふああ・・・オハヨウございますカレンさん・・・ムニヤムニヤ・・・」

ガスッ！

もう一度小突かれた。

「何が『オハヨウございますムニヤムニヤ』だ！アタシが来る前に掃除と朝飯の用意しとけって言っただろうが！」

ガスッ！

もう一度小突かれた。

「もういいから、コンビニでおにぎりでも買って来い！」

「ふあい・・・カレンさん」

昨日から、小突かれっぱなしだ。

それも なんだか気持ちいい・・・Mか？  
まあいいや。

階段を下りると目の前にコンビニがある。

「カレンさんは北海紅鮭が好きだから・・・あとお茶と・・・自分の食べる分も買って階段を駆け上がった。すると、ドアの前に女性が立っていた。

「あのおう、何か御用ですか？」

「あつ・・・探偵さん？」

うふふ・・・探偵さんって呼ばれちゃった。

「ええ、そうですよ」。

「でも、カレンさんって女性じゃ無いんですか？」

「あつカレンはうちの所長です。私はその助手で『ジヨー』と申します」。

「ジヨーさん？カッコいい名前ですね」

「いやあそれほどでも・・・さあこちらへ」

俺は、ドアをあけて「カレンさん！お客さんですよ！」とカレンを呼んだ。

「失礼します」。

礼儀正しい、一見お嬢様風・・・チョット好みのタイプ・・・うふふ

「ほら！ぼうつとしてねえで、お茶お出ししろ！」

「失礼しました。私、花園カレンと申します」

「あら？お若い方なんですね。私と同じくらいかしら？」

「いやいや、もう三十路です」

「ええっ！そうなんですか？ぜんぜんそんな風には見えませんよ  
お綺麗だし」

「ありがとうございます。それで今日は、何の御用でございますか？」

「私、郡山八ナ子と申します」

・・・意外とレトロ口な感じの名前だなあ・・・東北地方の信用金庫のキャラクターみたいな名前。

「はい、お茶でございます」

おれは、さっき買ってきたお茶をコップに移して出した。

「実は、最近ストーリーカーに悩まされてるんです」。

「ストーリーカーですか？」

「はい」

「警察に届けましたか？」

「警察には届けましたが、結局事件に成らないと動いてくれないんです」。

「そうですね、それじゃあ早速」

そこまで言いかけた所で郡山さんの携帯が鳴った。

郡山さんは携帯に出て、少し表情を曇らせると

「ごめんなさい、急用が出来ちゃいまして・・・この封筒の中に逆に私がストーカーを撮った携帯の写真と私の連絡先が入ってます、それ見てあとで連絡してください。そうだなあ明日の午前中がいいです」。

そう言うとおたふたと郡山さんは出て行った。

封筒を開け、カレンは写真を見た。

そして、物凄く怖い表情で写真を見つめていた。

俺もその写真を覗いた。

「あれ？花園さん？」

そこにはカレンの兄が写っていた。

「ヤロー・・・」

やべっ！俺は直感的に非難したほうが良さそうな気がしてチョット後ずさりした。

カレンは怒っていた。

まさか、花園さんがストーカーなんて・・・

「あの女、宣戦布告に来やがった」

「えっ？」花園さんに対して怒ってる訳じゃ無いんだ。

「当然、名前は偽名だろう・・・兄者が、今追っているカルト教団の信者の一人だろうきつと」。

「えっ？」

「おまえさつきから『えっ？』って他に何かコメント無いのか？」

「はあ・・・」

「あの凄腕の兄者が、尾行に気づかれるなんて在り得ない」

「そうなんですか？」・・・忍者だもんな。

封筒から一枚の名詞が落ちてきた。

『大神会』と書いてあった。

「ダイジンカイ？」

「いやオオカミを崇めている、カルト教団さ」

「オオカミ？って狼？」

「そう眷属って奴さ」

「ケンゾク？」ますます分らなくなってきた。

「普通に神社に祭られている神様だけど、奴らは違うのさ」

「どう違うの？」

「狐憑きって知ってるか？」

「はい、言葉だけは・・・こっくりさんですよね」。

「奴らはその狐憑きと言うか、自分の体に『大神』を憑依させる事によって、特別な力を得られるって考えてるのさ」

「じゃあ狼男に成るって事だ」と冗談言ってみた。

カレンは真顔で「そうだ」と言った。

吸血鬼と半魚人の次は、狼男かよ！

## Bark At The Moon

「おい！兄者のところに行ってくる。帰りは遅くなりそうだから、留守番頼む」と言い残して、カレンは出て行った。

俺は、事務所で暫く留守番していたが夜に成って飯を喰いに出掛けた。

「ヤッパ日高屋はいいねー、ラーメンと餃子とレモンサワーで740円」

爪楊枝をくわえながら事務所に帰る途中、電信柱の陰に人がうずくまっていた。

「痛い、お腹が痛い」

女性だ。

「大丈夫？」

俺は、声を掛けた。

女性は振り返った。

その人は、郡山ハナ子だった

「あっ！」

俺は、直感的にヤバさを感じた。

ハナ子を見る見るうちに険しい表情に成ってきた。

目は血走り、鼻にシワを寄せ、歯を剥き出し「ウー」っと低く唸った。

四つん這いのまま、今にも飛び掛かろうと身構えていた。

「狼女だー！」俺は慌てて逃げようとした。

「ズバツ！」俺の横で風切り音がした。

直後に右肩に激痛が走り、血が吹き出すのを感じた。

ハナ子は、俺の右側を追い越し様に肩口を引き裂いた。

狭い路地の行く手を塞ぐとヨダレを垂らした口でニヤリと笑い「アオーン」と遠吠えをした。

頭上には、満月が不気味に赤く輝いていた。

ハナ子は、ジリジリと間合いを詰めてきた。

俺は、後ずさりするのだがなんと足が地に付かず、ついに尻餅をついた。

腰が抜けたのだ。

ハナ子は、ヨダレを垂らした口を舌なめずりした。

ニヤリと笑うと、飛び掛ってきた。

すると、何かが俺の頭上を飛び越しハナ子に体当たりした。

大きな青い目の犬だった。

シエパードって言ったっけ？

よく警察犬とかで活躍している犬だ。

その犬は、俺とハナ子の間で身構えた。

「ジョリー！いい子ねえ・・・下がりなさあい・・・うふ」

野太い声がした。

背後から現れたのは、身長2mはありそうな大男だった。

「アラヤダ、あなたヨダレが垂れてるわよ」

何故か、オネエ言葉だった。

「ガル・・・邪魔するな！このオカマが！」

ハナ子が、吼える様に言った。

「アラ・・・聞き捨て成らないわね！この、偽物が！！」

そう言うと、大男は毛が逆立ち、息が荒くなった。

不意に男は、ハナ子に飛び掛った。

「速い！」

飛び掛り様に2・3発パンチを入れた。

ハナ子は5m程、吹き飛んだ。

1度は立ち上がったが、「貫様万歳！」と言って、自らの首を引き裂いた。

男は何事も無かったように振り替えると

「あらやだぁ・・・カレンの話よりずっといい男じゃない・・・好みのタイプかも」

俺は、空いた口が塞がらなかった。

その男は、髭面と言うか、むしろ顔の真ん中辺りだけ毛が生えていないだけの毛深い男だった。

手の甲もボウボウだった。

「あたし、フォクシーちゃん！よろしくね！これが、私の相棒のジヨリー！カレンから話は聞いてるわ！」

「『この偽物が！』って、貴方・・・まさか本物の狼男？」

「そうよ・・・そうだけど・・・心は女の子よ！・・・あらいケナイ、花園つちに電話しなきゃ・・・うふ」

訳が分からないけど、強い味方に違いない。

「うん、そうよぉ・・・あたしが居なかったら超危ないところだったんだから。うん チョットまってね」

「はい！花園つちが代わってだって」

「おう、久しぶり。危ないところだったんだって？一応、その場は近くの交番に俺が連絡入れるから、俺も合流するからチョット待っててくれ」

そう言っつて、電話を切った。

チョット、野次馬が集まってきたが警官がやって来て素早く黄色いテープを張った。

「佐呉丈さんですね？話は花園警部補から聞きました。今日はもう帰って頂いていいですよ」

「じゃぁ・・・帰ります」

俺は、事務所に向かった・・・オカマ狼男も付いて来た。事務所の前に着いた。

「あのう・・・今日は有難う御座いました」と言っつと

「あら？今日からあたしもここに住み込みよ」

ええー！！！！！！！！

物凄い冷や汗が出た。

大丈夫か俺のオシリ・・・

## 麦角アルカロイド

トントントントン、大根を切る音がする。

フオクシーは、朝食の準備をしていた。

フオクシーは、幸せだった。

ガスッ！

いきなり小突かれて目が覚めた。

「何時まで寝てやがる！」

「ふああ・・・オハヨウございますカレンさん・・・ムニヤムニヤ・・・あれっ良い匂い」

身体を起こすと肩に激痛が走った。

肩は、丁寧到手当てが施されていた。

「あら、起きたのダーリン」  
「ダーリン？」

はっ！俺は、反射的に肛門を押えた。

「やだ、何もしてないわよ〜もう」

カレンは、なにやら気に入らない様子だった。

「おいっ！なんでオカマチューバツカが飯作ってるんだよ！」

「あっごめんなさい、あたしが勝手にしたことなの・・・殿方に「飯作りさせられないわ」

カレンは、カチンと来た様子だ。

「おい！ジョリー！これやるぞ食え」

ジョリーは、カレンがご飯に味噌汁をかけて差し出すと、匂いだけでプイッとソツポを向いてしまった。

「見るよ！てめえの作った飯なんか、犬も喰わねえ」  
と言って、ゲラゲラ笑い出した。

「キー！！ジョリー！あんたって子は！あんたって子は！」  
フオクシーは、ジョリーを追い回した。

ジヨリーは、素早くカレンの後ろに隠れた。

「よせよ、怯えてるじゃねえかジヨリーがあ」

犬はその場の主人を本能で見分けると言うが、利口な犬だ。

「キー！なによカレン！チョットばかりキレイな顔してるからって、この男女！」

「何だと！このオカマ！」

カレンが手裏剣を投げた。

フォクシーは、軽く避けた。

「そんなの当たらないわよ〜べるべる〜」

やばい、この場で喧嘩が始まったらどうやって止めよう？

多分、無理。

そうだ！

「美味しい！！最高だよフォクシーちゃん！この味噌汁！おふくろを思い出した」

「えっ本当？嬉しい、大好きダーリン」

「ああ？なんだお前らもうそんな仲良しになっちゃったんだ？」

カレンは、なにやら含みのある笑いをした。

「いや、昨日は・・・えっと」

「やあねえカレン。昨日はダーリン怪我しちゃって、事務所の前で気絶しちゃったのよ・・・もちろん、何にもないから安心して」

「バカ野郎！なんで俺が安心するんだよ」

カレンは赤くなった。

そこに花園が入ってきた。

「おう揃ってるな、昨日は災難だったなジヨリー」

よかった、やっとまともな人が来た。

「検死解剖の結果、郡山八十子の体液から麦角アルカロイドが、検出された」

バツカク？

## 闇の眷属の末裔

花園は、壁に刺さっている手裏剣を見ると、「なんだ、お前ら又喧嘩してたのか？」と言った。

「ジョー、アンマリ気にしなくていいぞ、昔から朝の恒例行事なんだ」。

「えっ昔から？」

「俺たち3人は、兄弟の様に育ったんだ」

「そうなんですか？へえ」

「特にこいつら2人は同じ歳で、うちのお袋のオツパイを分け合った乳兄弟なのさ」

「どうりで、仲がいい訳だ」

「チヨット！誰と誰が仲いいってえ！」

と二人同時に言って、お互い一瞬間を見合わせると「フン！」とこれまた合わせ鏡のように同じ行動を取った。

「クスッ」と俺が思わず笑うと「笑うな！」とこれまた同時に言った。

「本題に入るぞ」花園が、このやり取りを終わらせた。

「そうそうバツカクってなんですか？」

「主に穀類に発生する植物の病気さ、麦角菌に感染すると毒素を作る、それが麦角アルカロイド」

「はぁ・・・そうですか」

若干、難しそうな話に成りそう・・・

「狼男の伝説知ってるか？」

「はい、伝説じゃない人も知ってます」

「その伝説は世界各地に有って、ヨーロッパなら狼男、南米ならワ  
ージャガー、中国なら野人、日本なら狐憑き」

「ああ、それならなんとなく知ってます」

「その殆んどが麦角中毒と狂犬病だったのではないかと言われてい

る」

「なるほど」

「麦角中毒は、四肢の麻痺、思考力の低下、幻覚・興奮等の作用がある」

「えっそうなんですか？」

「あのLSDは麦角成分の研究過程で発見されたものだ」

「ええっ！じゃあみんなジャンキーなの？」

「おそらく、毒性の低い幻覚や興奮の作用に特化した菌を作り出したのだらう」

「はあなるほど・・・でここにいらっしやる、本物さんはヤツパリ麦角中毒なんですか？」

「それは、あたしから話すわ」

フオクシーが、話し始めた。

「私は、中世ヨーロッパを恐怖のどん底に落とした闇の眷族の末裔よ。」

「じゃあ本当の話だったの？」

「私は、狂犬病を保菌しても死なない身体なの」

「えっ狂犬病って犬の病気じゃないの？」

「狂犬病は、あらゆる哺乳類に掛かる病気で致死率100%と言われてる恐ろしい病気」

「ええ？ヒヤクパー??」

「そう、ギネスに載ってるわ」

「うへー」

「脳にウイルスが達すると、発病して脳に障害が起こるのよ、発狂して性格が凶暴に成ったりするのそして死ぬ」

「怖い病気ですね」

「私達一族は、人間離れした身体能力を得る事が出来た。その代償が異常に濃い体毛、巨人症、それからあたしの場合は心が女の子なのよ」

「そうなんだ・・・」

## 自己啓発セミナー アキバ系

河奈知明37才、独身、体重100kg、彼女無し。

と言っか、生まれて此の女性にモテた試しが無かった。

引っ込み思案な性格もあるが、自分の体型にコンプレックスが有った。

趣味は、アニメとフィギュアと釣り。

マクロスFのシェリル・ノームが好みのタイプだった。

河奈は、詰まらない人生を送っていると思っていた。

神様は不公平で、自分に割の合わない事ばかり押し付けていると思っていた。

それもこれもみんな社会が悪くて、自分ではどうにもならないと思っていた。

河奈は、行きつけのメイド喫茶行く途中だった。

店の前まで来ると、マクロスのランカ・リーのコスプレをした女子がいた。

店の子だ、何度か見たことが有る。

「ねえ、君この前も来たよね？」

俺の事を覚えてくれていた。

「あのさあ、私バイト終わるからチヨット付き合わない？」

「えっ」いきなりの誘いにドキドキした。

「この先で自己啓発セミナーが有るんだけど、ノルマで一人連れていかなくちゃならないんだ」

チヨット、がっかりした。

「その後も予定無くて暇だから今度は私が付き合っから、人助けだと思って来てくれないかな・・・」

チヨット怪しげだったけど、この子可愛いから行っってもいいかなと思っった。

「いいけど・・・」

「じゃ！決まり！ありがとう！ちょっと待っててね」

ランカ・リーは、一旦店に入り私服に着替えてきた。

「私、郡山ハナ子」

「・・・？」

「変な名前でしょ、よく田舎の銀行の記入例みたって言われるわ」と言っ腕を組んできた。

少し、恥ずかしかつたけど嬉しかった。

セミナーの会場についた。

そこは、公民館の貸し会議室だった。

入り口でライ麦パンを配っていた。

「私たちが作ったパンです、どうぞ試食してください」

これ又可愛い子がニッコリとして配っていた。

河奈が、パンを受け取ると「あっ今の子に見とれてたでしょ！ブンブン！こんな可愛い子と一緒にいるのに！」とハナ子が言った。

パンを頬張ると席に付いた。

「大神 貫さんって人のセミナーなんだけど、すごくいい人なんだ」とハナ子が言った。

「ふーん」正直興味無かった。それよりちょっとお腹が痛い気がしてきた。

「ほら、始まるよ」

出てきたのは、身長130cm位の子供かと思う位小さな男だった。「こんにちは、沢山の人にお集まりして頂き大変嬉しく思っています」

だんだん、腹痛が痛くなってきた。

「ねえハナ子ちゃん、何だかお腹痛いんだけどあのパン変じゃなかった？」

「えっ？大丈夫だけど・・・痛むの？」

「うん・・・でも少し痛みが引いてきたみたい・・・大丈夫かも」

「そう・・・もしあれだったら、恥ずかしがらないでトイレに行っ  
てきなよ」

それは、出来れば避けられた。

せっかく女性の知り合いが出来たのに、きつと『ウ コ』のイメージに成ってしまう。

「分かった、でも大丈夫」

少し我慢していたら、痛みは引いてきた。よかった。

今度は、手足がポカポカと暖かくなってきた。

少し、頭がポーっとしてきて、妙に気持ち良くなってきた。

演説は続いていた。

「君たちは、社会全体に虐げられていると思わないか？割の合わない事ばかりと思わないか？」

そうそう、そのとおり。

「僕は、君たちの事を『キモい』とか思わない、むしろ専門知識に長けているスペシャリストだと思っている」

おお、いい事言うね。

「私は、背が低くてずっとその事でイジメに有ってました」  
体型の事でイジメなんて許せない・・・

「私は、それをバネに一念発起し起業しました！Y県K村に私が作ったファクトリーがあります、ここではコンピューターの組み立てやバイオテクノロジーの研究、アニメーションの製作などもしています。宿舎も完備しています」

ふーん・・・社員募集か・・・

「そこで、気の合う仲間と語り合いながら新しい人生をやり直してみませんか？」

「私は、あなたを必要としているのです」

あれ??なんか??すごくいい気持ち??何でだろう???

大神 貫さんか・・・なんか俺の事分かってくれそうな気がする・・・

「忘れないでください、必ず人生が一変します」

「詰まらない人生、終わりにしましょう！」

セミナーが終わった。

結局、人材募集だったのか???

よく分からないけど、貫さんはいい人だ。

「ねえ？私、行ってみようと思っただけど・・・よかったら一緒に行かない？」

「えっ・・・」

「Y県のファクトリーよ！一緒に生活しようよ」

「え・・・いいけど・・・」

「じゃあ決まり！メアド教えるね！赤外線使える??」

「うん・・・」

なんだか、夢を見ているみたいだ・・・とっても気持ちいい・・・

「ねえ・・・これからどうする??」

「えっ」

「私・・・何だかエツチな気分になっちゃった・・・」

「えっ??」

「HOTEL行かない??私、大きいヒト好きなんだ・・・パンダさんみたいで・・・」

「・・・いいけど・・・」

河奈にとって忘れられない一夜になった。

## 名犬ジョリー

河奈は、ファクトリーで充実した毎日を送っていた。ハナ子と言う恋人も出来たし。

ファクトリーは、バイオ部門とパソコン部門とアニメーション部門に別れていた。

構成するメンバーは50人位、大半はバイオ部門に従事していて、パソコン部門は5人、アニメーション部門は10人だった。

バイオ部門は、主にライ麦の品種改良を研究していた。とは言っても、実際に白衣を着て研究しているのは、3人で後は農場で作業をしていた。

河奈は、パソコン部門に配属されていた。

これは、秋葉原の専門ショップとネットのみで販売されていた。1日8時間働いて、夜に貫様の話を30分聞くだけで後は自由だった。

食事は、バイオ部門が作った有機野菜が中心で、チヨットだけ黒く成ったりするけどそれも無農薬だから仕方ない。

正直、チヨットだけ物足りないけど、おかげで20kgの減量に成功した。

河奈は、貫様の話の時間が好きだった。

真暗い部屋で貫様の前に一本だけ蠟燭を立てて、話が始まる。

話の中で私達は、美しい狼で大いなる山の神の使い。

話が始まると、なんだかとても気持ち良くなり、まるで映画でも見ているかの様な感覚になる。

貫様は、こつやって私達に奇跡を見せてくれる。

話が終わる頃には、まるで自分は狼に成った気がする。

狼に成って、日本に巣食う権力の皮を被った醜いブタどもを殺して

やりたい。  
そんな風を感じる。

ハナ子は、S県に出張中だ。  
何時もなら、話が終わった後は、二人で抱き合って気持ちの高ぶりを静めるのだが…獣の様に…  
寂しい…

貫様から直々にお呼びが、かかった。

部屋に入ると、ハナ子は殺されたと言われた。

「こいつらが、ハナ子を殺害した犯人だ」と言って、写真をみせられた。

男二人と女一人。

後、毛むくじやら一人と犬だった。

河奈は激しい憎悪に襲われた。

今こそ狼に成るときだと感じた。

「奴らの根城は、花園カレン探偵事務所だ」

…

「これを送り届けて欲しい」

ジヨーとジヨリーは、散歩中だった。

花園とカレンとフォクシーちゃんは、忍者の里に帰り、長に今後の対策についての相談に行った。

それから3日ほど経っていた。

ジヨリーは、ジヨーのボディガードとして残された。

「えっ？ジヨリーがボディガード？」

言い渡されて、俺は思わず尋ねた。

「何かご不満でも？」とカレンは答えた。

「ジョリー・・・あたしが居なくても泣いちゃだめよ・・・ダーリンをよろしくね」とフォクシーが言った。

「ははは！これ以上頼もしいボディガードはいないぞジョー！」と花園は言った。

そう言つて、3人はワゴンRに乗り込んで忍者の里に向かった。

正直言つて、フォクシーにはワゴンRは小さすぎて笑えた。

と言つわけで、ジョリーと留守番。

昼飯の買出しをかねて散歩に出かけることにした。

チヨット遠いコンビニまで弁当を買いに行き、途中あのさくらの公園で弁当を食べて、帰りに事務所から300m程の所にある橋の上からよく見える富士山をしばし眺めながらタバコを一服して帰るコース。

今日で3日め。

ジョリーもすごく喜んでいて今日は自分から散歩用の紐ををくわえて持つてきて、早く行こうと催促した。

本当に利口な犬だ。

そんなこんなでいま橋の上から富士山を眺めている所だ。

「ジョリー・・・あれが日本一高い富士山だぞ」と言つとジョリーはうなずいた。

「キレイだな」と言つとジョリーはうなずいた。

「お前つて、本当に利口だな」と言つとジョリーはうなずいた。

本当に話が判るみたいだった。

「いけね！今日はカレンさん帰ってくる日だっけ！ジョリー帰るぞ」午後1時45分頃だった。

その頃、河奈は焦っていた。

郵便局員に変装して荷物を届けようと思ったのだが、留守だった。

貫からは、この荷物は時限爆弾で午後2時にセットしてあると言われていた。

もう1時50分だった。

「どうしよう・・・誰もいない・・・」

事務所の前でウロウロしているとジョーとジョリーが帰ってきた。

河奈にしてみれば、殺人犯に出交したようなものだった。

「ひー!!」

河奈は、荷物をドアの前に置き、慌てて逃げて行った。

「変な郵便屋さんだなあ？」俺が荷物を取ろうとするとジョリーが吠えた。

ビククリして手を引っ込めるとジョリーは荷物をくわえて、階段を駆け降った。

「チョット!!ジョリー!!」

俺も慌てて追いかけたが、ジョリーは滅茶苦茶速かった。

河奈は逃げた。

ここまでくれば大丈夫だろうと橋の上で事務所の方を振り返った。しかし、目の前にジョリーが荷物をくわえて走って来ていた。

「あわわわわ・・・」

河奈は、その場で腰を抜かした。ジョリーは、荷物を河奈の前に置くと「ウー」と低く唸った。

「おい!ジョリー!」と言う声にジョリーは振り返った。

俺が橋に差し掛かると、ジョリーは激しく俺に向かって吠え始めた。「ジョリーどうしたんだよ、俺だよジョーだよ」

ジョリーはそれでも吠えるのをやめなかった。

ジョリーは何か気づき荷物をくわえると、震える河奈の頭上を飛び越えて橋の欄干に飛び乗った。

ジョリーは暫く欄干の上から富士山の眺めていた。

そして、俺の方に振り返り物凄く寂しそうな目をして、一粒の涙を流した。

そして、川に飛び込んだ。

「ジョリー何やってんだよ!」俺は叫んだ。

ジヨリーは、川に飛び込むと必死に泳いで遠ざかって行った。

「ジヨリーもういいから帰ってこいよ！！」

もう俺の声は届かない様だった。

ジヨリーの後ろ姿が小さくなっていった。

そして轟音と共に水しぶきが上がった。

俺は暫く事態を飲み込めなかった。

ただ「ジヨリー！！！！」と叫んでいた。

俺は、河奈の方を振り返った。

河奈は頭を抱えたままガタガタと震えていた。

「おいっ！郵便屋、何で逃げた？」

俺は、河奈の横腹に爪先で蹴りを入れた。

「お前、アレが爆弾だって知ってたな！！」

俺は、河奈の胸ぐらを掴んだ。

「ジヨリーを返せ！！！」

俺が河奈を殴ろうとすると、背後から影が覆いかぶさってきた。

河奈の目が、恐怖に凍り付いた。

「ジヨーどけ・・・」と言う野太い声が背後から聞こえた。

フォクシーが、物凄い形相で立っていた。

味方の俺でさえ、恐怖を感じる形相だった。

毛むくじゃらの手が軽々俺を退かすと、河奈の腹めがけて蹴りを入れた。

体重80キロはありそうな河奈が、まるで缶蹴りの缶の様に吹き飛んだ。

その時、河奈とフォクシーの間にカレンが割って入り。両手を広げ

「ダメ！！！」と言った。

フォクシーは「邪魔だ退け！」と言った。

カレンは泣いていた。

カレンが泣くなんて思いも寄らなかった。

カレンは、フォクシーに抱きつき「お願い、これ以上はダメ・・・これ以上は・・・怒りを静めて・・・お願いだから・・・」と言った。

河奈は気絶していたが、死んではいなかった。

花園が現れ、河奈を起こすと「殺人未遂、現行犯で逮捕する」と言っ  
つて手錠をかけた。

・・・ジョリーお前に助けられたのは2回目だな・・・本当に頼  
もしいボディガードだったよ。

## 内なる悪魔

「ジョー……起きてる？」

「うん……なに？」

「ごめんね……チヨット一杯付き合っ……」

「フォクシーは、ウイスキーのビンを持っていた。」

「いいですよ」

あんな事が有ったんだ、飲みたい気持ちよく分かる。

と言うか、俺も飲みたい気分だ。

「フォクシーは、コップを2個持つてくると、ウイスキーを注いだ。」

「あの子はね……赤ちゃんの時からアタシが育てたの」

「そうだったんですか……」（涙）

「アタシ、身体は男だから赤ちゃん産めないでしょ……」

「うんうん……」

「だから、自分の赤ちゃんだと思って育てたの……ジョーいいいい！！！！」

「フォクシーは、泣き上戸だった。」

「そうですか……うえーん」

俺ももらい泣きした。

「あのね、ジョーにお願いがあるの……」

「？」

「アタシ、もう直ぐ自分の中の悪魔を抑えきれなく成りそうなの」

「？」

「私の本当の両親は大神会にヨーロッパで捕獲され、無理やりに日本に連れて来られたの」

「フォクシーは、身の上話を始めた。」

大神会は、戦時中から超人兵士の研究をした。

あなたの知っている熊尾の研究も、陰で大神会が糸を引いていたの。

30年前、両親は実験目的で日本に連れてこられた。大神会は、日本を本気で我が物にしようとしている悪の秘密結社なの。

狼男の身体を研究して、超人兵を作ろうと企んでいた。母はアタシを身籠っていて、日本でアタシを産んだ。

アタシは、大神会にとって恰好の研究材料だった。

大神会は、アタシを両親から奪おうとした。

その行為に父は怒り、閉じ込められていた檻を破り研究員を皆殺しにし逃げた。

父はすでに怒りに我を忘れ、内なる悪魔に乗っ取られてしまったの。真の狼男として覚醒してしまった。

日本政府は、花園の父の十兵衛に退治するよう命じた。

アタシの本当の両親は、十兵衛に殺された。

そのとき、大神 貫も十兵衛に殺されたはずだったが、なぜか生きていた。

十兵衛が両親を殺した時、赤ん坊の泣き声が聞こえたの。

それは、アタシだった。

十兵衛は、丁度同じ歳のカレンに面影が重なり、どうしてもアタシを殺すことが出来なかった。

十兵衛は里にアタシを連れ帰り、長の反対を押し切り「この子が大人になり狼男に成り下がったならば、その時はこの手で殺します」と約束し、アタシを引き取った。

そう言えば、あなた花園つちの名前知ってる？

義郎って言うのよ。

十兵衛とお母さんのお春は、義郎とカレンとアタシを分け隔てなく育ててくれた。

そんな折り、十年前に大神会は、さらに狼男を日本に連れて来て又もや逃がした。

十兵衛は、すでに引退して一族の長の座についていた。

そして今度は、アタシ3人だけで退治しろと命じた。

そのとき、カレンは大怪我をしたの。  
そこからは、あまり覚えていないの・・・気が付いたら、花園つちが倒れていて・・・

聞いた話によると、カレンの怪我に逆上したアタシは、敵を倒したのだけど、前後の見境が無くなり辺り構わず暴れだした。  
花園つちが決死の覚悟でアタシを気絶させたの。

そのとき花園つちも深手を負った。  
十兵衛は、アタシとカレンを引き離れた。

カレンが、アタシの引き金に成ると考えたから。

そのとき、アタシを一人で里から出すのは危険と判断しカレンを一人里から離れて暮らすように命じた。

そのとき、カレンがジョリーをアタシにくれたの。

アタシが寂しくないようにって・・・

zzzzzzz・・・

俺は、寝ていた。

「ジョー！お願いってのはね！」

「なに！？・・・フォクシーちゃん」

俺は、すでにへべレケに成っていた。

「もし今度の戦いでアタシが又前と同じように怒りに我を忘れるように成ったら、貴方がこれでアタシを撃って」

フォクシーが出したのは古いコルトのリボルバーだった。

「銀の弾丸が6発込められているわ」

俺は、一気に酔いが覚めた。

「ジョリーの仇を討ちたい。でも感じるの、その時はアタシの中の悪魔が目覚める時だって」

「カレンや花園つちはアタシを撃つのを躊躇うわ。だけど、一瞬の迷いは、アタシが花園つちを殺すことに成る」

「だから、貴方に頼むの」

「アタシは、ジョリーの仇を討つわ！そうしたら、カレンや花園つち

ちや貴方を傷つける前に撃って」

俺は、迷った。

でも、必ずそうなるとは限らないし……

「お願い、アタシを人間のまま死なせて……怪物に成りたくないの」

俺は、黙って頷くと銃を受け取った。

## 慈悲無き運命

ジョーは、眠れなかった。

自分にフォクシーちゃんを撃つことが出来るだろうか？

それを考えると眠れなかった。

怪物に変貌してしまったフォクシーの事をジョリーはどう思う…俺は、ジョリーの死に報いたい。

ジョリーの死が、フォクシーを狂わせてしまう事をジョリーは望まない筈だ。

やはり、ジョリーの仇討ちは花園に任せた方が良いのでは…気持ちは痛いほど分かるけど…

明日もう一度、話し合おう…

そうこうしている内に朝に成った。

フォクシーが朝食を作るために起きた。

俺も起きると一晩考えた事を言った。

「もし、ジョリーの死が、フォクシーちゃんを怪物にしてしまつたらジョリーは、浮かばれないと思う…花園さんに任せたら？」

「…そう言つと思つた」

「ジョリーは、フォクシーちゃんを撃ち殺す為に俺を助けたんじゃないよ」

「…」

「気持ちは分かるけど…」

「もういいわ！昨日事は気にし無いで」

「じゃあこれは返すね」

「それは…取つといて…万が一の為」

「いいけど…おれはフォクシーちゃん撃てないよ…」

「有り難うダーリン…優しいのね」

「報告します。河奈は爆破に失敗した模様です。相手側の被害は犬のみの模様」

「くくく…いいのだよ、一番効果が期待出来る獲物を仕留めた」  
「？」

「あのデブなかなかいい仕事したよ」  
「失敗ではないのですか？」

「地上最強のモンスターの誕生さ」  
「？」

「奴らはこの慈悲無き運命から逃れられないのだ…ハハハハ！」  
「そろそろカワイコちゃんの到着かな？」

「貫様、連れて参りました！なかなか手強い女でした」  
カレンが後ろ手に縛られ囚われていた。「チクシヨウ！」

「これはご挨拶だね。連れていけ！丁重にな…ハハハハ！」

## 赤頭巾ちゃんご用心

「それにしても遅いわねー・・・カレンったら」

「そう言えば、今日は一体どうしたのだろう？」

「せっかく作った、お味噌汁が冷めちゃう・・・」

「いつもなら、そろそろ喧嘩が始まってる頃だ・・・」

「リリリリリリ・・・」

事務所の電話が鳴った。

「アラツ？お仕事かしら？・・・ハイ、花園カレン探偵事務所です・・・??？」

「あーもしもし・・・ふふふふ・・・その声はフォクシーちゃんかな？」

「アンタ誰？」

フォクシーの顔色が変わった。

「つれないなー・・・フォクシーちゃんが一番逢いたい人間だよ  
ギリギリ・・・歯ぎしりがここまで聞こえた。

「そうそう、君の可愛い仔猫ちゃん預かってるよお」

「なに！」

まさかカレンが・・・

「お転婆で困ったよ、捕まえるのに部下が3人も殺られちゃった」

「おまえ・・・なにが望みだ・・・」

「フォクシーちゃん、きみ自身だよ」

「お前の物に成るつもりはない」

「えー、じゃあ仔猫ちゃんがどうなってもいいのかな？」

「くっ」

「ファクトリーまで来い！」

「行ったら、カレンは返してくれるの？」

「約束するよ・・・あっそうそう兄貴には内緒でね・・・そこにいるマヌケは一緒に来てもいいぞ・・・どうせ生きて帰れない」

「分かった、今から行く・・・花園つちには内緒だ」

「物分かりが良いね、話が早くて助かるよ」

「じゃ！待ってるから」

そう言つて電話を切つた。

「どうしたの？」

俺は聞いた。

「チョット行つてくる」

チョット行つてくるつて顔じゃなかった。

「カレンさんに何か有つたの？」

「ジョー、アンタには関係ないことよ」

「何言つてるんだよ！仲間じゃないか！」

「危険なの！ヤバいのよ」

「そんなの承知の上だよ」

「生きて帰れないかも知れないのよ！」

「カレンさんが戻つてこなかったら、給料貰えないし・・・そんなつたら食えなくなるから困るんだよ」

「バカ！何言つてるのよ！」

俺は、リボルバーを抜いた。

「連れて行つてくれないなら、フォクシーちゃんここでぶつ放すよ」

「チョット！物騒な事言わないで！・・・仕方ないわね・・・じゃ

あ車の運転お願い」

「よし！分かつた」

「車から、離れちゃダメよ」

「分かつたよ・・・チョット待つて」

「？」

俺は、武器庫のロッカーを開けるとスコープオンを取り出した。

## ジヨール&フォクシー

俺は、Y県にワゴンRを飛ばした。

飛ばすと言うほどスピードは出ないけど…

登坂車線は迷わず使う感じで…

出発前に銃を用意する俺に「そんなもの使わせないわよ」と言ったきり、フォクシーちゃんは無言だった。

なんとなく気まずい感じだったのでカーステレオをかけたたら、オジ  
ーがかかった。

「月に吼える」だ…

これまた気まずい感じだったので、慌てて切った。

そうこうしている内にファクトリーに到着した。

少し離れた湖畔のパーキングに車を駐めた。

「ジヨール、あなたはここで待ってて」

「なんで？俺も行く」

「足手まといななのよ」

「!?!」

「二時間して帰って来なかったら、あなた独りで逃げなさい」

「…」

「事務所に帰っちゃ駄目よ、花園に連絡しなさい」

「チョット待ってフォクシーちゃん！フォクシーちゃんがもし怪物に成ってしまったら、誰が止めるの？俺にその役目託したんじゃないのー!」

「それは…とにかく、危険なのよ!」

押し問答が続いた。

コンコン!

誰かが、ドアをノックした。

花園だった。

「ご苦労！」

花園が言った。

おれは、経緯を説明した。

「フオクシー独りで行かせる訳にはいかん、それこそ思う壺」

「でも、カレンが……」

「なあに大丈夫！直ぐに脱出してくるさ、くのいちだぜ」

## 脱出

カレンは、縛られていた。

椅子に座った状態のまま、背もたれごと縛られていた。

特に檻に入れられて居るわけではなく、コンピューター製作工場の一室と言ったところだ。

何やら見張りの二人が話している。

「これから、貫様のお話がある、終わり次第戻るから、暫く一人で見張ってくれ」。

「はい、分かりました」。

残されたのは、なんともチャライ若造だった。

先輩が、行ってしまつと「あー、やってらんねー」と言い、ドアの横の椅子に座った。

カレンは、『チャンス』と思った。

「ねえ」

普段では使わない猫なで声をだした。

男はこつちを向いた。

「かゆいの〜」

「なに？」

「か〜ゆ〜い〜」

「どこが？」

「恥ずかしいから、言えない…」

「言わなきゃどうする事も出来ない」

「えー」

カレンは、足を開くと視線を股間に向けた。

「お願い掻いてえ」

男はゴクリと唾を呑み込むとカレンの股間に手を伸ばして来た。

もう少しで届くところで「いや〜んエッチ！」と言う声と同時に顔面につま先がめり込んでいた。

「気安く触るな！」メリツと言う音と共に男は仰向け倒れた。

「えーと、切るもの無いかな？」

幸い工場内で工具類は、沢山あった。

「あった、あった」

カレンは器用にカッターナイフを背中越しに手に取ると意図も簡単に縄をほどいてしまった。

「クソ！よくもやってくれたな！」

と言って部屋を出ていった。

「諸君！」

ファクトリーのホールで貫の演説が、始まった。

「今こそ立ち上がる時だ！」

一同「おー！」と言った。

「狼だけが、神を名乗る事を許された気高き生き物」

「そして君達は、狼と成り闘うのだ！神の名において！」

「今こそ、蒼き気高き美しい狼に成りて、国家権力の傀儡なる豚どもに神の鉄槌を降り下ろす時が来たのだ！」

「君達の前に置かれたパンは、ただのパンではない」

「神の力により、狼になるパワーが封じ込まれている」

「さあ、そのパンを食し、今から訪れるであろう奴らを血祭りに上げるのだ」

「毛むくじやらの大男は、殺さずに連れて来い」

「さあ、闘いだ！」

「けっ！バツカじゃないの！」

ふいにスピーカーから女性の声が聞こえた。

カレンだ。

「おい！てめえ！よくもか弱い乙女を監禁してくれたな！危うくレ

イプされるところだったぜ！」

「きつ貴様！」

「えーちなみに建物に火を点けたから、なるべく早く逃げた方がいいよ！じゃあね！バツハハイ！」

「何！急いで火を消せ！」

何人かが、廊下に出ると廊下の西のはじから火が出ている。

既にとてもバケツで消せる様なレベルでは無かった。

「貴様！とても無理です！」

一人が報告に行った。

「この役立たずが！早く、カレンを追え、殺しても構わん！」

各々、ホールを出て行った。

既に何人かは、薬が効き始めていた。

徐々にその人数は増えて行き、暫くすると唸り声や喚き声が聞こえる様になった。

貫は、二人の側近のボディガードと共に隠し通路から逃げようとしていた。

隠し扉が開き、逃げようとした瞬間、足に激痛が走った。

手裏剣が刺さっていた。

「逃げようだったって、そうは行かねえっての！」

カレンが立っていた。

「貴様！何処に武器を隠してた！」

「いやんエツチ！恥ずかしくて言えないわ」

「くそ！殺つてしまえ！」

ボディガードの二人は、屈強な体つきをしていた。

「ふん！チットは出来そうじゃん！」

一人はナイフ、一人はトカレフを持っていた。

「きつたねー！飛び道具かよ！男なら黙って拳で来いよ！」

「黙れ！」

男は引き金を引いた。

「シユン！」

風を切る音がして、カレンが消えた！

次の瞬間、拳銃を持つ手に手裏剣が刺さっていた。

男が手を押さえて屈み込むと、背後から耳に息を吹き込まれた。

「いい事してあげる」と囁くと後ろから股間に手を入れ、握り潰した。

拳銃の男は、白目を剥いて悶絶した。

「ドウダイ！よかったかい！あーバツチイ！」

「くそ！」

貫は手裏剣を抜き、這うように隠し通路に入った。

「待ちやがれ！」

カレンが追い掛けようとすると、素早くナイフの男が割って入った。

「！」「コイツ只者じゃねえ」カレンは強者独特のオーラを感じた。

「！」

ナイフの男が、視界から消えた。

「キン！」

背後から喉に伸びて来たナイフを手裏剣の受けた。

そのまま、肘を脇腹に入れようとすると、気配が又消えた。

カレンが振り返ると誰もいない。

相手は、常に死角に入り気配を消す事が出来る暗殺者の様だ。

カレンの背後を簡単に取れるなんて、カレンの知る限り花園くらいだった。

「ヤベエ、強すぎる…」

次の瞬間、僅かに殺気を感じた。

しかも避けられない殺気を。

『殺られる!』

「パキューン!」

乾いた銃声が聞こえた。

振り返るとナイフの男の腕から血が流れていた。

「カレンさん!」

ジヨーだった。

「くっ!」ナイフの男は、隠し通路に逃げた。

「あっ!」

ジヨーが慌てて追おうとすると、カレンが引き留めた。

「奴は超一流の殺し屋、ここに入るのは死を意味するわ……」

「えー!」

「何はともあれ、サンキュー!助かったわ」

「いや、どう致しまして!」

「火事だし、ズラカルか?」

## 突入

話は少し逆登り15分程前、俺達三人は、少し高い所からファクトリーを眺めていた。

「どうせ正面から突っ込む気だったんだろ」

花園が言った。

「でもカレンが！」

「アイツなら大丈夫！つか、なに捕まってるんだって！帰ったら灸を据えなきゃだな」

「花園さん、屋上にへりが有りますね」

「脱出用か？」

花園は、双眼鏡を覗きながら

「狼煙が上がった！」

「えっ！」

「カレンからの合図だ。建物の西側に火を点けたな」

「俺は単独で一気に屋上を目指す、フォクシーとジョーはカレンを探せ！いくぞ！」

俺達は、ファクトリーに向かった。

「ジョー！建物の西側に火を点けた意味分かる？」

「？」

「西側は入口の反対側、敵を入口に誘導するのが目的」  
「なるほど」

「みんな東向きなの」

「うんうん」

「カレンはその背後に居るわ」

「そうか！西側が火事だから東に逃げたと思わせてるんだ！」

「だから、奴等をやっつけながら、遡って行けばいいの！」

「かーキツいな！」

「闘いはアタシに任せて！大丈夫！天国のジョーに怪物に成った

「アタシは見せられない！悲しむもの！」

「そうだよ！ジョリーの為に闘おう！」

「ファクトリーに着くと続々とヨダレを垂らした奴等が出てきた。」

「あなた、人間撃てる？」

「そう言われてみると急に怖くなってきた。」

「アタシが大体片付けるけど、自分の身は守りなさい。殺らないと殺られるわよ」

「でも…」

「あなたの銃は、威力ないから急所に当たらなきゃ死なないわ。足を狙いなさい、動けなく成るから」

「分かった！」

「さあイクワヨ！」

「フォクシーは、信じられないスピードで襲い掛かった！」

「たった一撃で三人が吹き飛んだ。」

「ピクリとも動かない。」

「絶命してる。」

「薬の力でプツンしてるジャンキーとは言え、所詮は秋葉のオタクが殆んどだ。」

「最初からものが違う。」

「人間離れた体力に忍者としての訓練をうけてるのだ。」

「次から次へと千切っては投げ千切っては投げ。」

「デタラメな強さだ。」

「これは、相手も欲しがる訳だ」

「俺が安心して見ていると」

「ウガー！」

「二三人がフォクシーの攻撃を避けこつちを襲ってきた。」

「俺は、スコープオンを腰に構えると安全装置を手前に引きセミオートにした。」

「フルオートにしたらフォクシーに当たっちゃった」  
「言われた通り足を狙った。」

パキューン！パキューン！パキューン！  
相手は膝を撃たれてその場に倒れた。  
それでも這って向かってきた。

パキューン！

今度は腕を狙った。

三人ともその場で動けなく成った。

「畜生！ぶつ殺す！」

口は達者だ。

ある意味安心した。

とはいえ、火事からは逃げられないな…

ゴメンなさい！

フォクシーの通った後には死体の道が出来ていた。

「うへー」

俺はなるべく見ないようにして進んだ。

そして「ホール」と書いてあるドアの前に来た。

フォクシーは、その前に立っていた。

中では、何やら戦闘状態らしき音がしていた。

「フォクシーちゃん、なんで入らないの？」

「入るのが怖い…」

「？」

「カレンはここに居るわ」

「えっ」

「アタシ屋上に行くから、カレンをよろしく！」

そう言うところれ又凄いスピードで走って行った。

俺がホールのドアを開けるとカレンさんが、後ろからナイフを持っ  
た男に襲われていた。

俺はスコールピオンを男に向けて撃った！

弾は男の腕に命中した。

「カレンさん！」

「何はともあれ、助かったわ」

「火事だしズラカルか？」

「カレンさん！屋上に行きましょう」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3702n/>

---

慈悲無き運命

2010年10月18日00時46分発行